



福島県

吉田 賢人さん(北幾世橋)

取材者：認定特定非営利活動法人市民公益活動パートナーズ 古山・松田
取材日：1月12日

浪江町の変化を直に感じたいと思い、戻りました

大学生から社会人となった20代のほとんどの間、浪江町を離れて首都圏におられた吉田さんだからこそ、同じ年代の友人・知人とつながりたいという思いが強いのでしょうか。ご友人たちとの交流の場として開設を計画されているウェブサイトが盛んになり、若い世代が結集して、これからの浪江町や相双地方の大きな力となることを願っています。



▲吉田さんをモデルに、お知り合いがお描きになった絵とともに

◆あの東日本大震災の時は、どうしていらっやいましたか
当時、私は大学3年生で、神奈川県にある寮にいましたが、すごい揺れでしたね。思わず外に出ましたが、戻ってテレビを付けると、仙台空港に押し寄せた津波の映像が目飛び込んできました。衝撃的な映像でしたので今でも鮮明に覚えています。
その後、原発事故もあり、家族は福島市に避難していましたので、正月などはそこに帰省していましたね。
小学校3年生から高校3年生まで相馬野馬追に出場していました。中学校3年生の時に南

相馬市小高区の乗馬クラブに入り馬術競技を始め、明治大学から声を掛けていただき進学しました。当時、強豪と言われていたのですが、1階が厩舎でその上に男ばかり約6畳の部屋に3人ずつ。18人ほどで生活するような清潔感のない学生生活でした。大学を卒業後は、千葉県富里市の有限会社成田乗馬クラブに就職して7年間勤め、29歳で退職しました。
その後、浪江町に戻り、念願だった相馬野馬追にも出場しています。昨年は新型コロナウイルスにより規模縮小と残念な気持ちもありましたが、震災以降も先輩方が地域の伝統文化を守り続けておられますので、私も大好きな野馬追の歴史を継承していきたいと思っています。
代表を務める株式会社SAMでは、主に復興事業や再生可能エネルギー事業などに携わっており、双葉郡や浪江町の「復興」と新たな「まちづくり」の一助になりたいと思っています。

◆震災後の浪江町はいかがですか。友人・知人、あるいは町に何か伝えたいことはありますか
震災後間もなく、実家の荷物整理などで一時帰宅した時は、町並みを見て、こんなにも変わってしまったのかと寂しさもありましたが、以前の職場を退職して浪江に戻る頃には復興も進んでいましたし、暗い印象は無くなりました。
同級生の何人かが浪江町や南相馬市、いわき市などに戻ってきていますが、それすらお互いに気付けぬ状況なのも何か寂しいな。また、避難先での就職や、遠方で家庭をもつ人たちもいますが、それぞれの事情や環境の下で頑張っていると思います。今は新型コロナウイルス感染症拡大の影響で動きづらいつつありますが、そんな地元仲間たちと改めて情報交換したいと思っています。
南相馬市に住む友人が浪江町で花の栽培を始めました。他にもつながりたいと思っている人たちにも気付いてもらえるように、彼と「何か動き出さないか」とウェブサイト立ち上げで発信しようと相談をしています。サイトを通じて仲間を募ったら、同世代のコミュニティができるのではないかと期待しています。



浪江のこころ通信

第116号

平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、町内全域に出されていた避難指示は、平成29年3月31日に「帰還困難区域」を除き解除されましたが、多くの浪江町民は福島県内外に分散して避難生活を続けています。町を取り巻く状況が徐々に変化する中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

「浪江のこころプロジェクト」は、町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信(※1)」を通してお届けし、皆さんの思いや暮らしぶりを発信・共有しようとするものです。

一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※2)が中心となり、全国各地のNPO、大学などの皆さんが取材を進め、浪江町と連携し「浪江のこころ通信」を編集・発行しています。

- ※1 浪江のこころ通信は、町民の皆さんがお話した「こころ」を伝えることを大切にするため、取材者が聞き取ったまとめた原稿をほぼ原文のまま掲載しています。
- ※2 一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、大学、NPO、企業、経済団体、行政などが連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

「浪江のこころ通信/第116号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒979-1592
浪江町大字幾世橋字六反田7番地2
「浪江のこころ通信」宛て
FAX 0240(34)4593

